

〈代理〉と〈代替〉

「誰かの代わりに」(三年)

鷺田清一
哲学者

最近の生徒たちには、みずからをますます追いつめるような強迫が、じわりじわりつものつてきているような気がしてなりません。(中略)

おそらく、自分がこのままで大丈夫なのか、不安なのだろうと思います。社会の先行きが見えない、これからもつとよくなりそうだととても思えないということもあって、このままでは身を支えきれない、棄てられるかもしれないという、根柢もはつきりしない怯えを突き離せないからでしょう。つまり、「できなくなったら終わり」という感覚です。「できなくても大丈夫」という感覚が持てないのです。

それは(教科書中の文章でも少しふれましたが)、「これをするのは別におまえでなくともいい」「おまえの代わりなんかいくらでもいる」という「代わり」(これをわたしは《代替可能性》と呼んでいます)ではなくて、それとはちょうど逆の「代わり」、つまり「あなたができないんだったら、きつと誰かが代わりにやってくれるよ」という

「代わり」(これは《代理可能性》です)です。国家や社会システムに委^{まか}せ、また依存するのではなく、自分たちで支え合う、いつてみれば自前のセイフティ・ネットをきちんと用意しておくこと、これが本文中で「インターディペンデンス(支え合い)のネットワーク」と呼んだものです。

じつさい、一九九〇年代の前半、バブルの崩壊時以降に思春期を送ることになった世代にはこういう感覚がじわじわ浸透していて、UターンやIターンというかたちで地方を仕事と生活の地盤とする若者たちのグループがこれまたじわりじわり増えてきています。

わたしはこうした静かな動きになにか新しいまっとうな生き方の兆しを見えています。現代という時代、とくに3・11以後、わたしたちの日常生活の基盤がいかにわたしたち自身によっては制御不可能なものであるかが露見してきました。電気というわたしたちに不可欠のエネルギーを供給する原発という装置がいったん事故を起こせば

まったくコントロール不能になること。わたしたちの労働環境から物価の変動、(食の)安全性までを規定しているのが、グローバル経済という、だれも(経営者自身ですらも)コントロールできない投機的なゲーム(金融カジノ)に支配されているということ。このことの危うさを、敏感な二、三十代の人たちはすでに視野に入れて活動しはじめています。物流から経済、食材調達から仕事の連携まで、自分たちである程度コントロール可能な規模の仕組みに、暮らしの基盤を組み立てなおしていこうというわけです。

このことの意味するところを生徒たちに伝えようと、この本文を草しました。



1949年京都府生まれ。哲学者。京都市立芸術大学学長。専攻は臨床哲学・倫理学。主な著書に『語りきれないこと 危機と傷みの哲学』(角川学芸出版)、『じぶん・この不思議な存在』(講談社)など。